西田敏行さんを偲んで（六波羅蜜の先に）

元々お彼岸は仏道修行の期間ということもあり、毎年仏道修行の六波羅蜜（布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧）に関する話を順番にさせて頂いています。ただ、昨年のお彼岸でひとまず智慧までのお話は終わりましたし、今年からは何かしら私が気になったことを仏教としては、ということでお話していければと思います。そういった中で最近、私が一番心に残ったのは令和6年10月17日、76歳で亡くなられた西田敏行さんの訃報です。つい最近も出演されていたのでとてもびっくりしたのを覚えています。今回は西田敏行さんを偲んで著書『役者人生、泣き笑い』から引用もしながら振り返っていきたいと思います。

西田さんは終戦してから2年後の昭和22年に福島県で生まれました。実の父親が5歳の頃に亡くなり、母親が他の方と再婚した為、母親の姉夫婦に引き取られて育ったそうです。幼少期はそれで色々と思うことがあったそうですが、そういったものを含めて演技の肥やしにされたそうです。戦後、映画や演劇が大衆娯楽となったのですが西田さんも幼いころからご両親とよく観に行かれたそうです。そして小学5年生の頃には俳優になりたいという想いを持ち、学校ではよく映画の役を真似てクラスの人気者だったそうです。その後、一人上京して役者を目指していくのですが、最初はなかなかうまくいかなかったそうです。東京の人間になろうとして無理をして言葉や態度を変えていくうちに、表情も性格も暗くなってしまったそうです。田舎のカッペで良いんだと開き直ってからは随分と心境が変わったそうです。日本演技アカデミーへも通い、同期の仲間と劇団を作るのですがお客さんは観に来てくれず、潰れてしまったそうです。そういった苦労を経て、劇団青年座に入り、25歳の頃に『写楽考』の芝居で主役となり、評判が広まって徐々に活躍の場が増えていき、後に「西遊記」や「特捜最前線」などテレビ出演が増えていきました。また、その合間に行われるリハーサルや打ち上げなどの時には「打ち上げ男」との異名を貰う程、盛り上げ上手だったそうです。テレビの中だけでなく、普段からも人に好かれる人柄だったようです。私は世代的に見たことがなかったのですが、そういった西田さんの地をそのまま出せたのが「池中玄太80キロ」という番組だと本の中には書かれていました。スペシャルを除いてもパート3まで放送されたというのですから大人気ドラマです。タイトルの80キロも当時の西田さんの体重をそのまま表記するほどで、西田さんもドラマの設定と実際の家族構成が似ていたこともあり、このドラマのことは「どこまでが芝居で、どこまでが現実なのか、わからないくらい」と書かれていました。紅白でも流れた「もしもピアノが弾けたなら」はこの時の主題歌です。ドラマやバラエティ、映画、ミュージカルと幅広く活躍される中で22作も続く代表作である「釣りバカ日誌」にも出演されます。そうやって活躍していく中で、2011年に生まれ故郷の福島が東日本大震災に襲われます。そこからは活躍の中で被災地の状況を伝えたり、農作物のPRをしたりと被災地によりそう支援活動をしていました。

長らく活躍されてた方なので西田敏行さんのイメージはそれぞれ皆様違うでしょう。玄太、という方もいれば釣りバカ日誌のハマちゃん、関西で長らく放映されているバラエティ番組、探偵ナイトスクープの西田局長、最近の方だと西田さんの遺作となったドクターXの蛭間先生かもしれません。私もそれぞれ印象はありますが、一番記憶に残っているのは20年以上務められた「人生の楽園」という番組での声だけのナレーションです。丁度、夕方6時の夕飯の時間、その支度をしながらテレビで流れているのを見ることが度々ありました。主に田舎や故郷に帰って暮らす方を紹介するのですが、西田さんが上手くご夫婦の生活ぶりを紹介していき、「素敵ですね～」などと褒め称えていくのです。声だけの出演ですが、そこに情感や共感がたっぷり込められていてこういう形で暮らしていきたいと思わせる不思議な魅力がありました。故郷が大好きで、役者として様々な表現をされてきた西田さんならではだと思っていました。

西田さんはその生涯を振り返るとかなりの苦労をされてきた方です。家庭環境で悩み、劇団を潰してしまい、役者として挫折も経験しました。家庭では奥さんと小さい喧嘩もしながら子育てに励み、様々な現場を体験する。病魔にも何度か襲われ倒れています。そういった経験からの想いが言動にも表れていて、とても人から好かれていた役者さんだと思っています。

仏教的にみてもこの生涯の苦労の中で、お彼岸にお伝えしている六波羅蜜を全て実践されている方だと思います。特に、布施行である「誰かの為に」という想いがとても強い方でした。西田さんは著書の中で役者としての考えを聞かれたときに次のように答えています。「とにかく多くの人を喜ばすこと。この一語につきますね。仕事でも酒の席でも、人をあきさせない、楽しませたい。人を楽しませることによって、自分自身が楽しめるんです。子供のころからそんな性格であったと記憶しています。ですから、自分は〝大衆演劇の役者〟であると。それを忘れないよう肝に銘じてきました。」と答えています。

布施行とはよく勘違いされますが、お金だけのことをいうのではありません。「誰かの為に」という慈悲の心を持ち、にこやかな顔で、優しいまなざしで、想いのこもる言葉で、心配りをすることも布施行なのです。まさに西田さんが行ってきたことそのものだと思いますし、布施行を続けるとこういう人から好かれる人になるのだという見本のような方だと思います。

西田さんのお別れの会の折、三谷幸喜さんが弔辞の際に文章は違うのですが同じ内容の言葉を紹介して次のようにお伝えしています。「安心してください西田さん。西田さんの遺した分身たちはこれからもずっと僕らを笑わせ、泣かせ、喜ばせ、楽しませてくれるはずです。感謝の気持ちを込めて、西田敏行様」と弔辞を結ばれています。供養とはこういうことだと思います。故人が残したものを受け継ぎ、それを繋いでいく。そして生きている我々は人生において苦労を重ね、自然と故人らと同じような六波羅蜜を重ね、また誰かに受け継がれていく。ぜひ、皆様もこの彼岸の機会に自分が誰かから受け継いだものを再確認してみてはどうでしょうか。受け継いだものを忘れない、それもまた一つの供養だと思います。